

宗密の『大乘起信論疏』について

吉 津 宜 英

宗密(七八〇—八四二)の『大乘起信論疏四卷』(以下、疏と略す)では冒頭に「西太原寺沙門法藏述、艸堂沙門宗密録之隋科注於論文之下」とあるように、法藏(六四三—七二二)の『大乘起信論義記』(以下、義記と略称す)に拠り、論の本文

の下に科文と注釈とを加えている。全体的にみればほとんど全篇が法藏の釈文を依用していると言ってもよいが、すでに日本の鳳潭や普寂が批判しているように、特に随文解釈の前

にある玄談の部分では法藏の義記のそれに比べると、かなりの書きかえが行なわれている。鳳潭などはそのことを宗密が法藏の意を体していない証拠として、厳しく批判するのであるが、我々としては順高や湛睿のように法藏と宗密との説の違いを会通して、両者は同一意見であったなどと論証する必要もないと同時に、鳳潭に与して宗密の態度を難詰するのも妥当とは言えないように思う。両者の解釈に違いのあることは歴然としているのであるから、それを確認した上で、その意味を追究し、その真理性を我々が判断すればよいので、最

初から五祖説を以って正統としたり、智儼法藏は正統であるが澄観宗密は異端であることは、真理の所在とその判断にとって大きな障害となるであろう。

さて、法藏の義記と宗密の疏との差異を先ず確かめ、その宗密の論述の仕方と彼の他の著作のそれとの比較を通して、その意図をさぐり、その意図と法藏のそれとの対比によって、両者の仏教思想理解への一助としたい。

法藏の義記では序文に続いて(1)弁教起所因(2)諸藏所撰(3)顯教分齊(4)教所被機(5)能詮教体(6)所詮宗趣(7)釈論題目(8)造論時節(9)翻訳年代の九門の玄談があつて、(10)随文解釈に入る。ところが宗密の疏では序文に続いて(1)弁教起因縁(2)約諸藏所撰(3)顯教分齊(4)明教所被機(5)能詮教体(6)所詮宗趣の六門の玄談のみで、随文注釈に入る。法藏の玄談の(7)(8)(9)に相当する部分は宗密の疏では随文注釈に入ってから出てくるので、別に問題はない。

両者に大きな差異のあるのは玄談の(2)(3)(4)(6)であるが、こ

これらの内(2)約諸藏所撰は論が対法藏(アビダルマ)の撰であり、菩薩藏に属するという義記の結論を取つたにすぎない。(4)明教所被機も法藏が權教(特に法相宗)の一分不成説に對して、この論が一切を所為(對機)としたものであることを縷縷述べているのを、宗密は結論的な部分に關してのみ引いている。この二門は広説を法藏の義記にゆずり、宗密はそれに準拠して結論のみを採つて注釈したのであるから、これら二門の間に差異はあつても、本質的なものではない。しかし、(3)と(6)とは両者の思想、あるいは起信論の扱い方の違ひに關連する問題を含んでいる。

法藏の義記では(3)顯教分齊は大きく二つに分けられている。つまり深玄記の十家の教判の検討を承けて、特に戒賢智光の有空の論争を紹介し、融會する部分と、四宗判を出す所とである。それに対して宗密の疏では第一に「約教詮法通局顯分齊」として五教判を出し、次に「約法生起本末顯分齊」として一心二門二義三細六麁の五重の説を出し、義記のように四宗判に言及しない。一方、(6)所詮宗趣について義記では一心法義を宗とし、信行得果を趣となすとした後で、五重相對の宗趣を示す。ところが、宗密の疏ではいきなり冒頭に法藏の四宗に第五円融具德宗を加えた五宗の説を出し、起信論が第四如来藏縁起宗に相當することを述べる。

このように義記と疏との間の玄談部分の差異は大きく言え

ば義記の四宗判が疏では五宗になつて顯教分齊から宗趣に移り、疏の顯教分齊には義記にはない五教判が入つてきた所にあると言えよう。この疏の玄談の形式が疏だけのものではないことを円覚經大疏の玄談をみることによって示そう。

円覚經大疏は(1)教起因縁(2)乘藏分撰(3)權実對弁(4)分齊幽深(5)所被機宜(6)能詮体性(7)宗趣通別(8)修証階差(9)叙昔翻伝(10)別解文義の十門分別から成つている。これらの中で先の疏の六門の玄談と対応させると、大疏の(3)と(4)とが併せて疏の(3)顯教分齊に相當し、(8)(9)は疏には相當部分がない。そこで先ず(3)權実對弁をみると、そこでは印度と中国との教判を列挙し、検討を加えている。特に印度の三種教の項で戒賢智光有空の論争を詳しく述べ、その論争を法相宗と法性宗の論争という形で一般化しながら、さらに破相宗を加えて三宗の同異を論ずる。また四種教としては天台の教判のみ、五種教としては法藏の五教判のみを取り上げる。五教判の説明の最後に五教判と円覚經の撰属を論ずる。

続いて第四分齊幽深では起信論に基く一心二門二義三細六麁の五重本末を示し、円覚經がこの五重の義理をすべて含んでいるという。次の(5)所被機宜と(6)能詮体性に續いて第七宗趣通別では疏にもあつた五宗が出ている。このように円覚經大疏の玄談第七門までの流れをみてくると疏の玄談六門はその所説を撮略したようになっており、特に義記に比べると奇

異に感じられる(3)顕教分齊における五教判の導入も、その前に大疏のように各種教判の検討があり、その上で華嚴の伝統説を提示したとみれば、かえって自然であることがわかる。

以上のことから、疏の玄談の形式が大疏のそのの中に、いわばすっぽり入ることがわかったのであるから、疏の玄談に問題点があるとすれば、大疏と共通のものとして扱うべきことが知られるのである。ここで問題は三つ出てくると思われる。第一は五教判の扱い方、第二は分齊幽深や顕教分齊に出ている五重本末の由来、第三は五宗の形成である。第一の五教判の問題については、宗密は慧苑以来の天台の藏通別円の化法四教に頓教を入れ込んで成立したという説を澄観同様に採用している。ただ澄観が五教判の頓教を禪宗に対配し、五教全体が対天台、対禪の形式で、別教一乗を示しにくいと感じ、別教一乗を示すものとしては四種法界説を前面に出し、五教判がやや軽く扱われているのに比べると、宗密は天台の四教に頓教を加えた所に五教の価値を認め、教禪一致を旨とし、自らの立場を円頓実教とも称すためにはむしろ都合のよい教判として、高く評価している。大疏の「華嚴宗主賢首大師、五種教を立つ、広く別章あり」(統藏一四、一一五左下)という書きぶりは、澄観がただ「賢首所立、広有別章」と言うのに比べると、両者における五教の扱い方の差異を反映しているであろう。

宗密の『大乘起信論疏』について(吉津)

さて、法藏において五教の建立はもちろん第五円教、別教一乗の華嚴の教えを高く位置づけるためであった。法藏の弟子の慧苑はその法藏の意図を継承しようとして、結局は五教を用いず、新たに四教判を出し、第四の真具分滿教の事事無碍法門こそが華嚴經の教えであると言う。澄観はその慧苑の説を斥け、五教を救いつつも、新たに四法界説を立て、第四の事事無碍法界を以って最高の教えとする。このように法藏・慧苑・澄観の三人は共に華嚴の教えの卓越を示すことに、その教判上の努力をしたといえよう。そして探玄記の玄談第九義理分齊、刊定記の玄談第七顕義分齊、華嚴經疏の第三義理分齊などにはその円教、滿教、無碍法界の内容を示した十玄門の世界が展開されている。

ところで宗密は少くとも疏や大疏をみると、第五円教が華嚴の教えであると明記するが、注釈の対象にしている円覚經なり、起信論なりはせいぜい第三終教、第四頓教の摂属とされ、分に円教に通ずるとされるにすぎない。そして他の人々の義理分齊に相当する分齊幽深が先にもふれた五重本末であり、全く起信論の一心二門に基づくものである。十玄門の説明は全く存在せず、ただ華嚴の一真法界を根本とする。

この五重本末の第一の所に大疏でも疏でも共通して、澄観の四十華嚴の注釈、行願品疏玄談第四弁定所宗の一文「無碍碍法界、寂寥虛曠、沖深包博、總該万有、即是一心」(統藏

七、二四九左上）を引いていることに注目したい。この行願品疏に対しては宗密の注釈があるが、そこでもこの一句を重視し、法蔵の十重唯識を援用して、それを五教に対配する。さらに注華嚴法界觀門の冒頭（大正藏四五、六八四中）でもこの一文を引用し、宗密の教学にとつて、この一文の比重が大きいことが伺われる。なぜ、この一文を重視するのであろうか。

この行願品疏をそれ以前の著作である華嚴疏と比較してみると、その玄談部分における行願品疏の特色の一つは、そこに「第五弁修証淺深」という一科が立てられ、禪宗を特別に扱う一門が出されたことである。この一門に対して宗密は行願品疏では注釈せず、円覚經大疏玄談の「八修証階差」が澄觀の修証淺深を承けたものであることが大疏鈔（統藏一四、二八二右上）で明記されている。この澄觀の修証淺深の一門は南北頓漸の禪宗を総括しているし、結局は華嚴の立場から、それらに一種の限定を与えているが、禪宗に正面から発言したために、逆に澄觀の釈風にも禪宗の影響が強烈に出た面もある。その一例が弁定所宗の總該万有の一心で法界を解釈する説である。澄觀は四法界説の根柢の一つとして唯心現を認め、そこで一心を説くことはあつたし、法蔵の入法界品の解釈を承けて、無障礙法界を一心で説明することもあつたが、この行願品疏の「總該万有、即是一心」は一步進んだ

解釈であり、そこに禪宗の特色ある心性説の影響を見ることができよう。

しかしながら澄觀にあつてははまだ法界觀を根底にした一心であつたものを、宗密は「一心を本源となす」として逆に一心を表にして一切法をそこに総攝する。澄觀の一文を転回点として法界觀から一心觀への展開が行なわれ、そして、それをより滑らかに行なわせ、しかも一心觀の内容を形成させたものが起信論の教理であつたといえよう。起信論の衆生心を一心として把握し、それが華嚴の一真法界と同一であるとなれば、真生二門を援用して五重本末の形成は容易である。澄觀までの十玄門にかわつて起信論の教理が宗密教学の支柱になつたことが知られるのである。

最後に五宗の形成について考えてみよう。法蔵の四宗判が五教章の十宗と関連し、特に第三唯識法相宗という規定が重要であることについては既に考察した。さて澄觀においては十宗が教判論から宗趣論の中に移されている。十宗ばかりではなく地論宗の四宗判なども同一の扱いを受け、徹底的に教と宗とが弁別されている。ただ例外は法相宗と法性宗とを論ずることであるが、この用例も法蔵の探玄記では「或有説者」（大正藏三五、一一三下）とあつたものを言いかえたのであり、中心のテーマは一乘三乘・樞実二教、つまり教についてである。法相宗や法性宗の用例は、もう一つ無相宗を加え

て、正しく宗趣論の中で扱われているといってもよい。その宗趣論では十宗の後四宗は(7)三性空有宗(法相宗)(8)真空絶相宗(無相宗)(9)空有無碍宗(法性宗)(10)円融具徳宗(法性宗)となり、法蔵の十宗とはだいぶ変っている。こうなるには慧苑の影響や、澄観自身の工夫によるが、宗密が疏や大疏の宗趣で四宗に第五円融具徳宗を加上し五宗としたのは澄観の十宗によつたのであろう。それでは何故に十宗そのまま継承しないで四宗判を基盤にしたのであろうか。それは無相宗とか法相宗とかの呼称を大切にされたためと、また澄観の十宗では第七真空絶相宗が頓教になり、五教が小始頓終円と並ぶ可能性もあるので、法蔵の五教を重視する宗密としては十宗を採用することはできず、四宗に第五円教に相当する円融具徳宗を加え、如来蔵縁起宗に終頓二教を含意せしめて、五宗を形成したのであろう。

以上、法蔵の義記と宗密の疏との違いを、特に玄談部分に限って三つに整理して考察した。特に円覚大疏との対応を示し、大疏と共通の問題点として考え、疏だけの問題として浮き上がった扱いを避けることができた。そこで、疏の問題としては何を根本的と考えたらよいのであろうか。私は澄観の行願品疏の引用をめぐる五重本末の所に力点があるように思う。一切を一真法界、つまり一心として把握することが疏全体を貫くものである。そして表題積から立義分、解積分の始

めにかけて元曉の起信論疏が処々で引用されているが、その文を検討すると一心觀に關わるものが多いのも顯教分齊の一心を中心とする五重本末の趣旨に沿つて法蔵には存在しない文例を援用したと考えられよう。

このようにみてくると五重本末説、さらには五宗の形成などを通じて、法蔵の義記を基盤にしながらも、宗密にあつては起信論は円覚経と同様の高い位置づけを与えられている。しかし、分に華嚴に通じながらも、一応華嚴の教理と一線を画する所に宗密教学の特色があるから、筆削記のように起信論の教理を円教に近づけてゆく方向や、日本の注釈家のように如来蔵縁起は五教判の後三教を含むといった議論は宗密の意図からは逸れてゆくであらう。また法蔵の義記を絶対化する必要もないし、このような疏と義記との対比を通して、起信論の大きな影響がみられる妄尽還源觀などの位置づけをも改めて考えなおす視点が得られるのではないかと思う。

(駒沢大学助教授)